

鎌倉城 (No.87) ・ 極楽寺旧境内遺跡(No.291)立会調査報告書

—鎌倉市稲村ガ崎三丁目 561 番 275 ほか 7 筆所在の横穴墓の調査—

例言

1. 本報告は鎌倉市稲村ガ崎三丁目 561 番 275 ほか 7 筆において施工された宅地造成工事に際して実施した鎌倉城・極楽寺旧境内遺跡の立会調査の報告である。発見されたのは横穴墓 2 基と残穴 1 基である。
2. 工事に際し実施した立会は、第Ⅰ期工事平成 22 年 12 月 21 日、第Ⅱ期工事平成 25 年 4 月 1 日、第Ⅲ期工事令和 2 年 3 月 31 日・4 月 6 日・4 月 10 日・4 月 30 日、1 号横穴墓立会調査 4 月 13 日～4 月 21 日、2 号横穴墓立会調査 5 月 7 日～5 月 14 日である。
3. 第Ⅲ期工事立会調査の体制は以下のとおりである。(所属は当時)
調査担当者 玉林美男 (鎌倉市教育委員会 文化財部 文化財課
会計年度任用職員 遺跡発掘調査研究員)
調査員 後藤 健・押木弘己・伊丹まどか・村松彩美・神田倫子
(鎌倉市教育委員会 文化財部 文化財課 会計年度任用職員)
4. 本報告の作成は以下の分担で行った。
執筆・編集 玉林美男
遺構挿図作成 後藤 健
遺物実測図作成 伊丹まどか・押木弘己・後藤 健・正木恵子
遺構写真撮影 後藤 健・玉林美男
遺物写真撮影 須佐仁和
写真図版作成 須佐仁和・後藤 健・玉林美男
遺物観察表 玉林美男・押木弘己
5. 本調査に係わる出土遺物及び各種記録類は、鎌倉市教育委員会が保管している。本調査地の略号は市教育委員会の統一基準に従って「KJ2005」とし、出土品への注記などに使用した。

本文目次

第1章 遺跡の立地と周辺の歴史	40
1. 遺跡の立地	40
2. 周辺遺跡の状況	40
第2章 調査の方法と経過	42
第Ⅰ期工事	42
第Ⅱ期工事	42
第Ⅲ期工事	42
第3章 検出遺構と出土遺物	44
第1号横穴墓	44
第2号横穴墓	46
まとめ	49

挿図目次

図1 遺跡位置図(上図)	51
図2 周辺の遺跡分布図(下図)	51
図3 発見された横穴墓の位置(上図)	52
図4 1号・2号墓配置図(下図)	52
図5 1号墓 遺構詳細図	53
図6 2号墓 遺構詳細図	54
図7 横穴墓入口の正面図(上段)	55
図8 出土遺物実測図(下段)	55
図9 第Ⅰ期工事で確認された横穴墓残穴	64

写真図版目次

写真1 遺跡遠景・1号横穴墓 調査前	56
写真2 1号横穴墓 人骨出土状態	57
写真3 1号横穴墓 完掘状況・遺物出土状況	58
写真4 2号横穴墓 検出状況・入口堆積土の状況	59
写真5 2号横穴墓 人骨出土状況	60
写真6 2号横穴墓 人骨・遺物出土状況・完掘状況	61
写真7 出土遺物	62

表目次

表1 出土遺物観察表	63
------------	----

抄録	64
----	----

第1章 遺跡の立地と周辺の遺跡

1. 遺跡の立地

本遺跡は江ノ島鎌倉電鉄「稲村ヶ崎駅」から直線で西に約250m、七里ヶ浜の海岸線からは約160～170m内陸に位置し、鎌倉市腰越から十間坂を下り、稲村ヶ崎に至る七里ヶ浜と称される海岸に面する丘陵から延びる尾根先端に存在する。本遺跡が存在する丘陵は標高40～50mで長さ約350m、幅は50～100mであり、鎌倉地方特有の地殻変動によって生成された細かな谷が発達している。遺跡の所在する丘陵の両側には南北に細長く谷が入り、海に面する尾根の南斜面は急峻な海蝕崖となっている。この海蝕崖を造成して近代以降の別荘開発により住宅が建てられているが、崖下には波蝕台が存在し、その上に飛砂が堆積して海岸に至っている。本遺跡近辺では幅約80～100mで、江ノ島鎌倉電鉄はこの波蝕台上に建設されており、国道134号線は波蝕台の端に盛土して建設されている。本横穴群は、北から南方の海に延びる急峻な尾根の先端、頂上に近い標高30m付近の南斜面に存在し、南東方向に向かって開口する。確認されたのは3基である。横穴からは南東に三浦半島、南西に富士山・箱根山塊・伊豆半島、南に大島が望まれる。

2. 周辺遺跡の状況

本遺跡の東約50mには①姥ヶ谷横穴群が存在する。同じ尾根にある為、本横穴群はその支群と考えられる。本遺跡の北東約210mには②一ノ谷横穴群、約780mには③月影ヶ谷横穴群、約1200mには④極楽寺切通横穴(成就院墓地内1穴)、北約460mには⑤二ノ谷横穴群、東約300mには⑥陣鐘山横穴が存在する。北東約1450m、極楽寺切通を越えた長谷地区には⑦光則寺境内横穴が存在する。これらは旧鎌倉城南西外縁部に存在する横穴群で、本群はその西端に位置する横穴群である。

本遺跡に最も近接する古墳時代後期～奈良・平安時代の遺跡は稲瀬川・美奈之瀬川両岸に存在する。稲瀬川右岸の遺跡では⑧長谷三丁目7番5地点(長谷観音堂周辺遺跡 鎌倉市N0.296 8～9世紀)、⑨長谷三丁目5番5、7番1、同番4、同番5地点、(長谷観音堂周辺遺跡・坂ノ下遺跡 鎌倉市N0.217 4～10世紀前半) ⑩坂ノ下50番3外地点(坂ノ下遺跡 6～10世紀。7世紀末～8世紀代が中心)があるが、これらの発掘調査では住居跡は確認されていない。⑨地点では用途不明の落ち込みが多く確認され、製塩に用いられた例のある三浦型甕も出土している。集落に伴う生産の場であろう。稲瀬川・美奈之瀬川左岸の遺跡では、⑪由比ヶ浜三丁目2番200地点では8世紀頃の土壌を伴わない仰臥伸展葬の埋葬人骨、⑫由比ヶ浜三丁目194番40地点では8～9世紀の遺物と竪穴住居跡4軒と

土壙、⑬由比ヶ浜三丁目 194 番 1・261 番 1 地点からは 7 世紀中頃～9 世紀前半の竪穴住居址と古墳時代後半の子供の伸展葬と石棺墓が、⑭由比ヶ浜三丁目 202 番 2 外地点からは 7 世紀後半～9 世紀後半前半の竪穴住居址と伸展葬の埋葬人骨が確認されている。川を挟んだ両者の距離は 500～700m であり、左岸集落に最も近接する横穴墓は⑦で稲瀬川の西岸に存在する光則寺境内に存在する。横穴墓の存続年代とこれら集落跡等の存続年代は必ずしも一致していないが、鎌倉郷の南西域である稲瀬川・美奈之瀬川左岸に形成された集落の墓域が南西側の山塊を超えた稲村ヶ崎の谷に主に造営されたと考えられる。当該遺跡までの距離は約 2 km である。

中世には極楽寺の寺地に取り入れられたとされ、本遺跡東側谷戸奥に熊野新宮が祀られ別当寺聖福寺が建立されたが、谷開口部の土地改変は殆どなく、谷部を含めた開発が行われたのは近代になってからである。

参考遺跡名

- ① ～③・⑤～⑦ 『鎌倉の横穴墓 一調査報告と資料集成一』東国歴史考古学研究所 2002 年 5 月・『鎌倉市史 考古編』 鎌倉市史編纂委員会編 吉川弘文館 1959 年 3 月
- ④ 未刊行 防災工事に伴う立会調査
- ⑧『長谷観音周辺遺跡 (No.296) 発掘調査報告書』(株)斉藤建設埋蔵文化財調査部 2008 年 9 月
- ⑨『神奈川県鎌倉市 長谷観音堂周辺遺跡(鎌倉市 No.296 遺跡)・坂ノ下遺跡(鎌倉市 No.217 遺跡)発掘調査報告書 鎌倉市長谷三丁目 5 番 5、7 番 1、4、5 地点』 (株)博通 2021 年 12 月
- ⑩「坂ノ下遺跡 (No.217) 坂ノ下 50 番 3 外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 30』 鎌倉市教育委員会 2014 年 3 月
- ⑪『神奈川県・鎌倉市 長谷小路周辺遺跡発掘調査報告書 一由比ヶ浜三丁目 2 番 200 地点 (No.236)一』長谷小路周辺遺跡発掘調査団 1997 年 9 月
- ⑫『神奈川県・鎌倉市 長谷小路周辺遺跡発掘調査報告書 一由比ヶ浜三丁目 194 番 40 地点一』長谷小路周辺遺跡発掘調査団 1997 年 6 月
- ⑬『神奈川県・鎌倉市 長谷小路周辺遺跡発掘調査報告書 一(仮称)由比ヶ浜こどもセンター建設に伴う由比ヶ浜三丁目 194 番 1、262 番 1 地点の調査一』 (株)斉藤建設埋蔵文化財調査部 2016 年 12 月
- ⑭『神奈川県・鎌倉市 長谷小路南遺跡 一鎌倉市由比ヶ浜 3 丁目 202 番 2 外所在遺跡の発掘調査報告書一』長谷小路南遺跡発掘調査団 1992 年 2 月

第2章 調査の方法と経過

第Ⅰ期工事

所在地 神奈川県鎌倉市稲村ガ崎三丁目 561 番 55 の一部ほか 1 筆

文化財保護法第 93 条第 1 項の届出 平成 22 年 10 月 1 日付 届出者 個人

開発面積 972.88 m² 尾根の切り土及び擁壁築造を伴う宅地造成計画

平成 22 年 10 月 1 日付鎌教委文第 1640 号 工事立会の意見を付して進達

県通知 平成 22 年 10 月 6 日付 文遺 63853 号 工事立会

県通知受付 平成 22 年 10 月 12 日 鎌教委文第 2582 号

県通知事業者送付 平成 22 年 10 月 12 日付鎌教委文第 1722 号

立会経過 平成 18 年、防災工事に際し立ち会ったところ横穴墓の残穴と思われる穴が確認されていたが、今回の工事において横穴が工事範囲となるため施工時に立会調査を実施することとした。平成 22 年 12 月 21 日、立会調査を実施。幅 113 cm、奥行 121 cm、高さ 78 cm の奥壁がアーチ型をした横穴墓残穴を検出。図面作成・写真撮影。奥壁近くに頭骨・歯・大腿骨・鉄製品小片が遺存していた。

第Ⅱ期工事

所在地 神奈川県鎌倉市稲村ガ崎三丁目 561 番 24 の一部ほか 2 筆

文化財保護法第 93 条第 1 項の届出 平成 25 年 1 月 17 日付 届出者 個人

開発面積 923.95 m² 尾根の切り土及び擁壁築造を伴う宅地造成計画

平成 25 年 1 月 23 日付鎌教委文第 2488 号 工事立会の意見を付して進達

県通知 平成 25 年 1 月 24 日付 文遺 64248 号 工事立会

県通知受付 平成 25 年 1 月 30 日 鎌教委文第 2582 号

県通知事業者送付 平成 25 年 1 月 31 日付鎌教委文第 2582 号

立会経過 工事施工中、人骨(頭骨 1)が出土したとの事業者からの連絡があり、4 月 1 日現地確認したところ、風成砂層及び黒色土であり、遺構・遺物は確認できなかった。

第Ⅲ期工事

所在地 神奈川県鎌倉市稲村ガ崎三丁目 561 番 275 ほか 7 筆

文化財保護法第 93 条第 1 項の届出 令和元(2019)年 11 月 19 日付 届出者 個人

開発面積 990 m² 尾根の切り土及び擁壁築造を伴う宅地造成計画

令和元年 11 月 27 日付鎌教委文第 3001 号 工事立会の意見を付して進達

県通知 令和元年 12 月 4 日付 文遺 65140 号 工事立会

県通知受付 令和元年 12 月 5 日 鎌教委文第 3227 号

県通知事業者送付 令和元年 12 月 6 日付鎌教委文第 3227 号

発見届・保管証提出 令和 3 年 2 月 2 日

県文化財の帰属通知 令和 3 年 2 月 22 日

協議・立会・調査経過

開発事業の事前協議において、埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行い、現地確認を行った。遺跡が急傾斜地で確認調査が出来ないが、平成22年小規模横穴内に人骨が出土した状況に鑑み、工事中に横穴墓・人骨などが発見された場合は発掘調査が必要である旨説明し、工事中に発見された場合は教育委員会で保護の措置を執るので協力するよう要請し、了解を得た。

令和2年3月31日(火)、現地で工事状況確認。斜面は表土が殆ど無く、急傾斜で岩盤が南側に落ちており、現状では横穴は存在しないことを確認。工事中横穴や人骨が出土する可能性があるため、何か異常があれば連絡するよう依頼した。

4月3日(金)夕刻、事業主より人骨が出土した旨連絡があり、協力するので早急に調査を実施してほしい旨要望があった。

4月6日(月)現地確認したところ横穴墓であることが確認された。天井に穴が開いていたため中に入って観察したところ、副室を持つ横穴墓であり床面・副室に人骨が存在し、入り口が砂で塞がれているものの、奥壁近くは岩盤が露呈している状況が確認された。施工業者の協力を得て外側から横穴入口部分の砂を除去し、入口の確認作業を行った。遺構の略測を行い、奥壁天井高約2.2m、奥壁幅約3m、長さ約5m、副室約1m四方の未開口の横穴墓であることを確認した。

4月7日(火)、調査計画を立案。人員・車両・機材等の手配を行った。

4月9日(木)、事業者が来所し対応を協議。立会実施中の不時発見の遺構であり、また事業者が個人であるため、施工業者の協力を得て市教育委員会で調査を実施することを再確認した。13日(月)から二週間の予定で調査を実施する旨を伝達。現場での重機等による作業協力を要請した。事業者より5月6日までに終わるなら良い。現場は協力させるとの回答があった。

4月10日(金)、現地にて工事現場担当者と調査方法等を協議。入口確認の作業手順を現場担当者と検討する。入口部分確認のため重機で入口部分を探すが、作業スペースが狭く入口前面の砂の堆積が厚く深いため、作業が難航する。休日を挟むため一旦埋め戻す。

4月13日(月)、機材搬入。入口部分を再発掘。入口部分土層断面図作成。横穴前面は風成砂のほぼ水平堆積であり、明瞭な遺構面は確認できなかった。天井穴より横穴内に入り横穴内・入口部の飛砂を除去。横穴墓外側から入口部を確認。外側の入口付近西側で須恵器蓋坯の坏部分小片が出土した。人骨は写真实測で平面図を作成することとした。

4月14日(火)、入口から奥壁までを半裁し、西側を掘削。上層の土層断面図を作成。写真撮影・基準点移動。

4月15日(水)、横穴内西側の人骨を残しながら床面まで掘削。西側人骨を写真实測。東側人骨の調査開始。西側人骨取り上げの準備。木工ボンドの水溶液を

散布。

4月16日(木)、横穴内東側を調査。西側人骨の取り上げを行う。東側人骨写真実測。

4月17日(金)、東側人骨取り上げ。人骨下の土を土嚢に入れて採取。横穴内清掃。

4月20日(月)、横穴内清掃・写真撮影。横穴内・外測量。

4月21日(火)、横穴内測量・写真撮影。平面図追加。作業終了し、現場撤収。

4月30日(木)、現地の工事現場担当者から横穴がでたとの電話連絡があり、午後1時過ぎに現地に赴き確認したところ、岩山の岩盤に沿って飛砂が除去されており、岩盤に空けられた横穴入口に砂が詰まった状態で天井まで飛砂で埋もれていた。現地での以後の掘削は中止するよう要請すると共に、庁内で対応を協議し、連休明けから調査を行う事とした。

5月7日(木)、現地調査開始。重機にて入口付近を掘り下げ、入口を確認。現況写真撮影。

5月8日(金)、測量用原点移動。入口部分土層断面図作成及び写真撮影。墓室縦断面図作成ため西側飛砂部分を除去。

5月11日(月)、飛砂部分縦断面土層図作成。入口の黒色土堤部分を精査。図面作成・写真撮影。入口部分を岩盤面まで掘り下げ、精査。図面作成・写真撮影。人骨部分詳細写真撮影。

5月12日(火)、西側人骨取り上げ。西側人骨下の土を全て採取。西側には二体の成人人骨が埋葬したままの状態重なっている。直径1cm程度の小玉1個、刀子2本、半分位の7世紀後半と考えられる土師器坏片が出土。

5月13日(木)、東側部分人骨取り上げ。室内西側人骨下の土の採取続行・完了。室内遺構精査・測量。奥壁・中央部縦横断面図作成。写真撮影。

5月14日(金)、横穴墓前面の岩盤面精査。重機で岩盤直前まで掘り下げて岩盤を露出するも、特に遺構は存在しなかった。傾斜角30°位か。作業を終了し現地を撤収した。

第3章 検出遺構と出土遺物

第1号横穴墓(図5)

位置 第Ⅲ期の工事で最初に発見された横穴墓で、南面する海蝕崖の頂上付近に南に向かって開口する。開口部底面の標高は30mである。

遺存状態 発見時に西側天井の一部を欠損したが、天井の崩落はなく、風成砂で入口が塞がれた状態で保たれており、発見時の攪乱もなく、遺存状況は良好であった。

堆積土 風成砂で埋まるまで開口していたようで、入口の閉塞施設は特に見られなかった。最上層は褐色の飛砂である。この層は玄室部分の入口側約1/3まで覆っていた。第2層は泥岩粒・褐色土を含む暗褐色砂で、奥壁で約10cm、入口部で約20cm堆積しており、埋葬された人骨の過半を覆っていた。第3層は泥岩粒を多く含む粘性のある暗褐色土で、入口から210cm奥まで堆積していたが、入口部が最も厚く、45cmほどであった。両側壁に接した部分の堆積が厚く、中心が薄いことから、尾根上部から崩落した土が堆積し、順に奥に流れ込んでいったと考えられる。第4層は泥岩粒・褐色砂を含む粘性のある茶褐色土で、入口の一部のみ観察された。尾根上部からの崩落土と考えられる。第5層は泥岩粒・褐色土を含む茶褐色砂で、入口部分のみに見られた。土層断面図で見られるように、後世の攪乱はないと考えられる。又特段閉塞施設と考えられる土層堆積も確認できなかったことから、埋葬後も常に開口していたと考えられる。

構造 平面形は撥形で、奥壁東側に副室が設けられている。玄室から羨道部にかけての主軸はN-22°-Wであり、全長は主軸方向で440cm、入口から副室奥壁まで536cmである。天井はドーム形を呈する。床面は平坦で棺座・棺室は設けられていない。奥壁から羨門に向かって緩やかに下降している。床面の傾斜角は約6°で、開口部は奥壁から約40cm下がっている。羨道部と玄室部の境界は明確ではないが、開口部から280cm奥の所で高さ5cm程の段差が付き、奥が若干高くなり人骨が集中していることから、ここから奥が玄室と考えられる。玄室内西側では奥壁と直行する形で幅12~18cm、深さ6cm程の浅い溝がこの段から奥壁に向かって約130cmの長さで掘られている。羨道部東側には幅30~60cmの浅い溝が玄室の手前30cmの所まで延びている。長さは250cm程で深さは20cm程である。奥壁は半円形に近い縦長のアーチで、奥壁幅302cm、奥壁高228cmである。副室は奥壁の東端から側壁に沿って奥に掘り込まれており、平面形は入口の幅1m、奥壁幅87cm、天井高90cmである。天井は不正形であるがドーム形をしており、入口から奥壁までの天井高は同一である。副室東壁下には幅7~14cm、深さ6cmほどの細い溝が羨道部まで延びており、羨道部東側の溝に側壁下で接続している。

埋葬状況 横穴発見時、人骨が露呈している状況であり、工事関係者により酒と線香が手向けられていたが、内部の攪乱はなかった。人骨は3ヶ所のブロックに分かれる。中央軸線上には人骨はなく、東西両壁面と副

室に集中していた。

西側人骨 玄室の段差上に幅 85 cm、奥行き 40 cm の範囲で 10～20 cm 大の海で洗われて丸くなった泥岩塊を集め、そこから 90 cm 程奥、奥壁から 20～30 cm の所に 30 cm 大の同様の泥岩塊を 2 個置き、その間に人骨を集積している。人骨は奥壁まで存在するが、頭骨は入口側と中央付近に存在し、入口側では少なくとも 2 個体の頭骨を確認した。中央付近では下顎骨と歯の集中箇所が 1 ヶ所存在した。脊椎・肋骨・腰骨・指骨の残存は良くなく、四肢骨のみが顕著に遺存していた。

東側人骨 西側人骨同様に玄室段差上に幅 50 cm、奥行き 90 cm の範囲で 10～30 cm 大の西側同様の丸くなった泥岩塊を十個ほど集め、その奥に東壁に接して 2 個、それから 50 cm 離れて東西に 2 個の丸くなった泥岩塊を置き、その間の空間に頭骨・四肢骨を集めている。石の下からも頭骨・四肢骨が検出され、頭骨は少なくとも四個体確認された。中央の大きな集積の入口側に下顎を含む頭骨、同じ集積の東壁側に頭骨が 2 個、西側にこの集積奥壁側に下顎骨が存在し、東西 2 箇所の頭骨の奥壁側には四肢骨・肋骨が存在した。

副室人骨 副室内及び副室の前 50 cm まで四肢骨が確認されたが、30 cm 位までが集中度が密であり、副室内人骨と考えられる。副室内は殆ど埋まっておらず、枯れ骨が散乱している状態であった。骨は東壁に沿って集中しており、四肢骨・肋骨などがほぼ側壁に平行して存在していた。

出土遺物 入口羨道外の西側の岩盤上から須恵器有蓋坏の坏部の小片が出土した(図 7-1)。東側人骨の南端の泥岩塊上から刀子と思われる鉄器(図 7-2)が、副室人骨の西側から鉄釘(図 7-3)が出土した。須恵器坏は復元口径 11 cm、7 世紀はじめ頃の湖西窯かと推定される。刀子は茎部分に欠損はなく 5 cm を計り、木質痕を残す。身は 3.8 cm を残す。鉄釘は残存長 3.3 cm、断面正方形で、一辺 1.5 mm を計る。

第 2 号横穴墓(図 6)

位置 1 号横穴墓の北東約 1.8m で発見された横穴墓で、南面する海蝕崖の頂上付近に南に向かって開口する。開口部底面の標高は 30.3m である。

遺存状態 1 号横穴墓の東側に擁壁を構築するため岩盤を掘削し、斜面に堆積していた風成砂を除去している際に入口を確認し、その段階で連絡が入った。そのため入り口部天井の一部を欠失していたが未開口であった。風成砂で入口が塞がれた状態であり、遺存状況は極めて良好であ

った。玄室西側の入り口側で小規模な天井・側壁の崩落が認められたものの崩落は僅かであった。

堆積土 風成砂で入口が埋まっていた。風成砂で埋まるまで開口していたようで、入口に顕著な閉塞施設は見られなかったが、入口天井下に入口に平行した堤状の土の堆積が存在した。最上層は褐色の飛砂である。この層は開口部から約 3.6m、玄室部分の入口側約 1/3 まで覆っていた。第 2 層は上層よりやや暗い暗褐色砂で、2' は風成砂の土壌化の少ない、1 層からの漸移層である。3・4 層は暗褐色土で粘性・締まりがある。含有する泥岩粒の多寡による分層である。3 層に泥岩塊が多い。版築状の堆積が見られないことから風成砂が土壌化したものと考えられ、自然堆積土と考えられる。5 層は暗褐色粘質土で締まりが良く、軟質泥岩粒を多く含む。最下層の 6 層は鎌倉の中世の遺構であれば土丹(泥岩塊)版築層と称すべき層で、茶褐色土に大量の破碎された細かな軟質泥岩塊が含まれており、良く締まっている。入り口から 65 cm 程奥まで認められた。中央部は水が流れたのか、溝状に窪んでいた。7 層も茶褐色土に泥岩塊を含むが、上部に破碎軟質泥岩塊が多いことから分層してある。最下層の 6・7 層は閉塞の為の遺構の残存とも考えられるが、入り口部分の岩盤に亀裂が走り、溝状になっていることから、入り口部床面の補修かもしれない。遺存した人骨の状況からは 1 号横穴墓同様、埋葬後も開口していたと考えられる。

構造 平面形は撥形で、羨道部の主軸は N-5°-E であるが、入口から 350 cm のところで西壁が東に屈折しているため、玄室の主軸は N-14°-E となる。東壁は入口からほぼ直線である。全長は入口中央から奥壁まで 667 cm である。天井はドーム形を呈する。床面は平坦で棺座・棺室・副室は設けられていない。奥壁から羨門に向かって緩やかに下降しており、傾斜角は 8° である。入口から 2.7m の所で 8 cm 程高くなり、傾斜角は同様に 80 cm 程続くが、そこから床面はほぼ水平になり、段から 160 cm 付近まで続く。この付近から奥に人骨が集中しており、人骨集中部分は 5~6 cm 低くなっていた。傾斜は 4° である。開口部は奥壁から約 64 cm 下がっている。羨道部と玄室部の境界は明確ではないが、開口部から 2.7m 奥の所で高さ 8 cm 程の段差が付き、奥が若干高くなり人骨が集中していることから、ここから奥が玄室と考えられる。玄室内側壁下には東側では幅 2~10 cm、西側では幅 3~12 cm で先の段まで溝が掘られていた。深さは 2~4 cm である。奥壁は頂部が高くやや尖り気味のアーチで、奥壁幅 274 cm、奥壁高 206 cm で

ある。側壁・天井には良好に肋状の化粧彫り痕が遺存していたが、入り口から 4m 付近で天井の小規模な落盤が認められた。天井部の剥落痕跡からすると岩塊の量が少なく、人骨が遺存する西側人骨頭部のみに集中して存在するため、また入り口中央部に亀裂が存在しその上に地業がなされて床面が水平にならされていることから考えると、崩落後室内の片付けと補修が行われたと考えられる。横穴前面の地形は横穴底面より上部は岩盤の傾斜が 54° とかなりきついが、底面より下部は 30° 程に緩やかになる。岩盤上には横穴側部で 5~10 cm、入り口から下で 25~30 cm の厚さで良く締まった黒色土の堆積を確認した。この層の上に風成砂が堆積していたが、入り口部分中央位まではほぼ水平堆積で、それ以上が斜面に対して吹き上がったような斜面堆積となる。斜面堆積の実測は出来なかったが、入り口床面から 2m 以上確認したが風成砂であった。2号横穴墓の東側は谷が入り込んでいるが、あるいは更に下部に地滑り地形による小平場が存在するのかもしれない。

埋葬状況 横穴発見時、人骨が露呈している状況であり、内部の攪乱はなかった。中央軸線上には人骨はなく、東西両壁面に沿って二ヶ所のブロックに分かれ、側壁に沿ってほぼ長方形になるような配置で人骨が遺存していた。かなり風化が進んでいたが、両ブロックとも顕著に脊髄が遺存しており、遺骸の上から数回にわたり遺骸を積み重ねた様子が観察された。

西側人骨 玄室の段差上に幅 80 cm、奥行き 170 cm の範囲で人骨が遺存していた。人骨は頭を入口、足を奥壁に据えた伸展葬で、頭骨の入口側と足骨の奥壁側には列状に 10~30 cm 大の海で洗われて丸くなった泥岩塊を集め、区画としていた。最上部の人骨はこの横穴墓に埋葬された最後の人骨と考えられ、一体分の骨がきちんと並んでおり、手足の指の骨も確認されたことから、この場所に伸展葬で葬られたと推測される。この骨の下からも伸展葬を思わせる状況で人骨が出土した。頭骨から下肢骨まで、ほぼ上の人骨と近接して確認されたが、脊椎・肋骨・腰骨などはかなり崩れていた。乳幼児の歯も確認されている。このため、何体埋葬されたのかは、今後の人骨の分析を待たなければならない。

西側人骨の頭部の入り口側に側壁・天井の小崩落があり、その下から土師器坏断片が出土した。7世紀後半頃と想定される。天井部の剥落痕跡からすると岩塊の量が少なく、人骨が遺存する西側人骨頭部のみに集中して存在するため、また入り口中央部に亀裂が存在しその上

に地業がなされて床面が水平にならされていることから考えると、崩落後室内の片付けと補修が行われたと考えられ、土師器や須恵器の断片が一部しか遺存しないのはその際取り片付けられたためと考えられる。

東側人骨 西側人骨同様に玄室段差上に幅 80 cm、奥行き 180 cm の範囲で人骨が遺存していた。人骨の周辺は土が黒くなっていたが、炭とは異なる所見であった。人骨は頭を入口、足を奥壁に据えた伸展葬で、数体が重なっていた。大腿骨が上下逆さまになり、又奥壁側に四肢骨が集中するなどしており、追葬時に遺骨の片付けが行われたことが伺われた。脊椎・肋骨・腰骨などはかなり崩れていた。又乳児の歯が確認されている。このため、何体埋葬されたのかは、今後の人骨の分析を待たなければならない。

出土遺物 東側人骨からは骨製の玉 3 点（図 7-13～15）、骨製小玉 19 点（図 7-16～34）・銅製鐙（図 7-11）、鉄製品（図 7-10）各 1 点が出土したが、腐敗した骨の中に埋まっていたため詳細な位置は不明である。骨製玉はロクロ成形で、東側人骨の 3 点は直径 0.95 (15)・1 cm (13・14) で左右の高さが異なる。孔の径は 14 が 0.45 cm、他は 0.6 cm で共通している。骨製小玉もロクロ整形で、いずれも直径 0.35 cm と同一規格で、31 が 0.4 cm、19 が 0.38 cm とやや大きく、0.36 cm (34) が 1 点ある。孔は 0.15 cm (30)～0.28 cm (17) までであるが、0.21 cm～25 cm が多い。銅製鐙(11)は復元直径 1.6 cm で、指輪であろう。西側人骨からは土師器坏 1 点（図 7-4）、刀子 4 点（図 7-5～7）、骨製玉 1 点（図 7-12）が出土した。土師器坏は直径 11.1 cm、高さ 5.2 cm を測り、内面は滑らかなナデ整形、外面はミガキ調のヘラ削りが行われている。東側頭骨からは鉄製刀子 1 点（5）、左手付近からも鉄製刀子 1 点（6）が出土したが、いずれも先端を欠失している。また上半身から刀子先端部の断片（図 7-7）が出土した。右手付近から骨製玉（図 7-12）が出土した。直径 1.1 cm、左右の高さも同じ 0.9 cm を測り出土品中一番直径が大きい。下半身から鉄釘 2 点（図 7-8・9）が出土した。

まとめ

本遺構は宅地造成に伴い発見されたが、偶然の発見とはいえ、事業者・施工者の迅速な対応と寛大な調査協力により、良好な状態で遺存した横穴墓の調査を実施することが出来た。1号墓・2号墓共に埋葬後、攪乱を受けることのない状態で遺存していたと考えられる。1号墓は7世紀初め、2号墓は1号墓よりは造営

は新しいものの7世紀代と考えられ、折り重なった多数の人骨の出土から、数代に渡る埋葬が行われたと推定される。1号墓には奥壁に幅・奥行き、高さとも1m程の副室が掘り込まれており、類例が乏しい形態である。埋葬は副室のみで完結されるのではなく、前面の玄室と一続きで利用されていた。このため「龕」とはしなかった。形態からは奥壁完成後に東壁に沿って任意に掘り込まれたことが推察されるが、なぜこのような副室を増設したかは分からない。平成22年、当該地に隣接した工区で同様の遺構が確認され、人骨が若干遺存していた。当時は横穴墓に付随するものとは考えなかったが、今回の発見で横穴墓の副室であった可能性が浮上した。当該地には副室を持つ横穴が複数存在したと推測される。なお、平成25年4月1日、当該地に隣接する工事区域内で風成砂及びその下層の黒色砂が確認され、人骨が若干出土した。当時遺構は確認されなかったが、本横穴墓群と関わりがあるかもしれない。

1号・2号墓とも破断した須恵器・土師器・刀子が出土したことから、玄室内の片付けが行われたことが推測されるが、2号墓では東側人骨からは骨製の玉3、小玉19・銅製の小鐙、鉄製工具が、西側人骨からは刀子4、骨製玉1が出土し、副葬品内容が異なる、あるいは東西で男女の埋葬区分があったのかもしれない。また、2号墓では東側人骨の周辺の土が長方形に黒くなっており、また東側・西側人骨とも人骨が重なるように出土していること、細い釘が若干出土していることから、棺ではなく、板囲いの区画のようなものがあったのではないかと推察される。

海岸に近く、風成砂によって密封された状態であったことにより骨製玉・骨製小玉が遺存していた。骨製装身具の副葬品の存在は貴重である。骨製玉の制作は棒状に整形した骨から円筒状の骨を切取り、穿孔して芯を入れ、それをロクロ整形したのであろうか。

報告書紙数の関係で詳細は割愛するが、横穴墓の規模を天平尺で換算してみた。1号墓 全長439cm(14.8尺)、奥壁高226cm(7.6尺)、奥壁幅298cm(10尺)、入口幅65cm(2.2尺)、副室幅102cm(3.4尺)、副室長95cm(3.2尺)、副室高89cm(3尺)。2号墓 全長667cm(22.5尺)、奥壁高207cm(7尺)、奥壁幅273cm(9.2尺)、入口幅83cm(2.8尺)である。1号墓の奥壁幅298cm(10尺)、副室高89cm(3尺)、2号墓の奥壁高207cm(7尺)は天平尺が基準尺として用いられた可能性を示すものとして検討する価値を示していよう。天平尺は唐尺と同一で和銅六(713)年の格で高麗尺が廃止されてからもっぱら用いられたとする(『日本史広辞典』山川出版社 1997年9月)が、使用の開始はそれ以前に遡ろう。なお、天平尺は曲尺の9寸7分8厘とされるから、29.6cmで計算した。

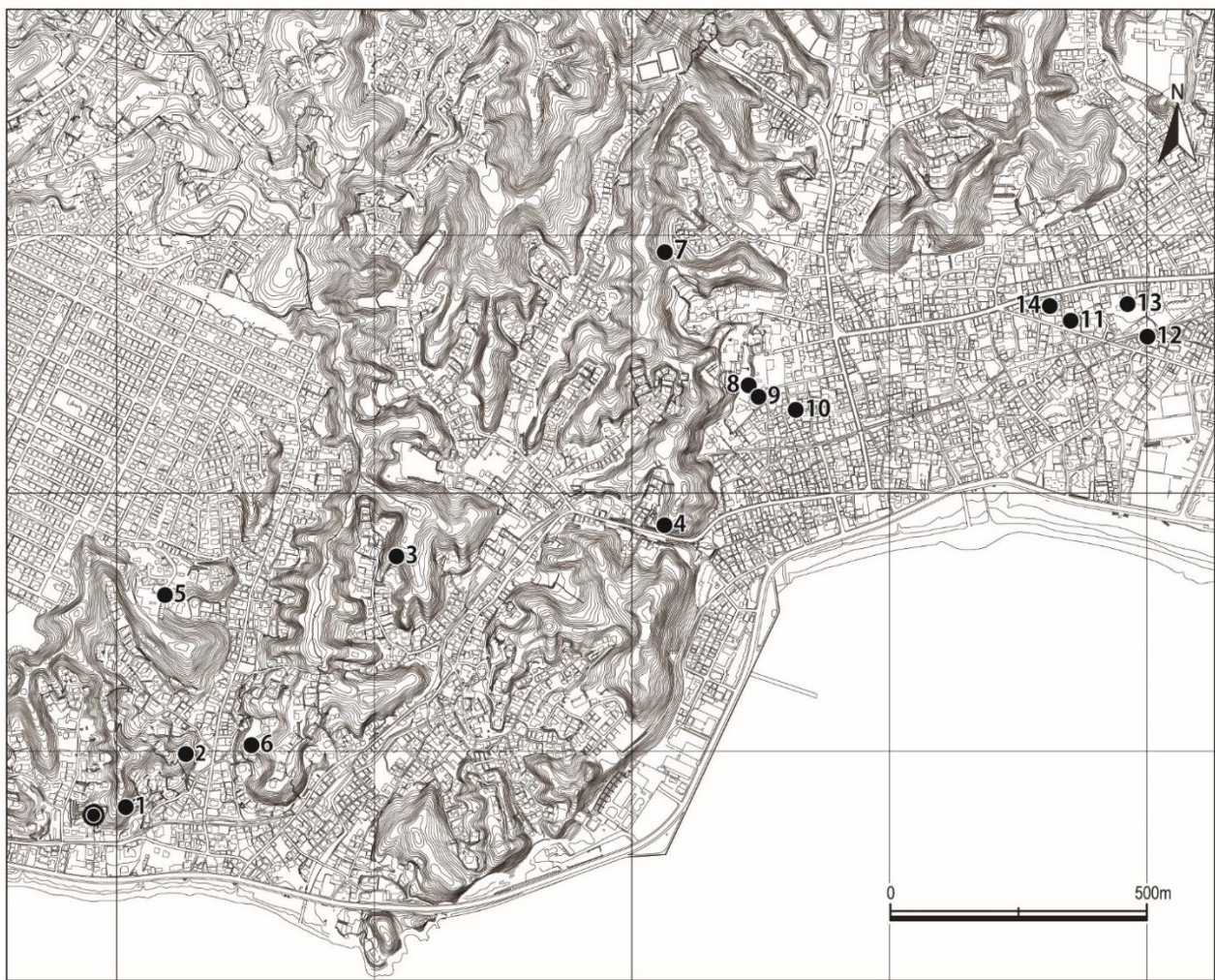


図1 遺跡位置図(上図)

図2 周辺の遺跡分布図(下図)

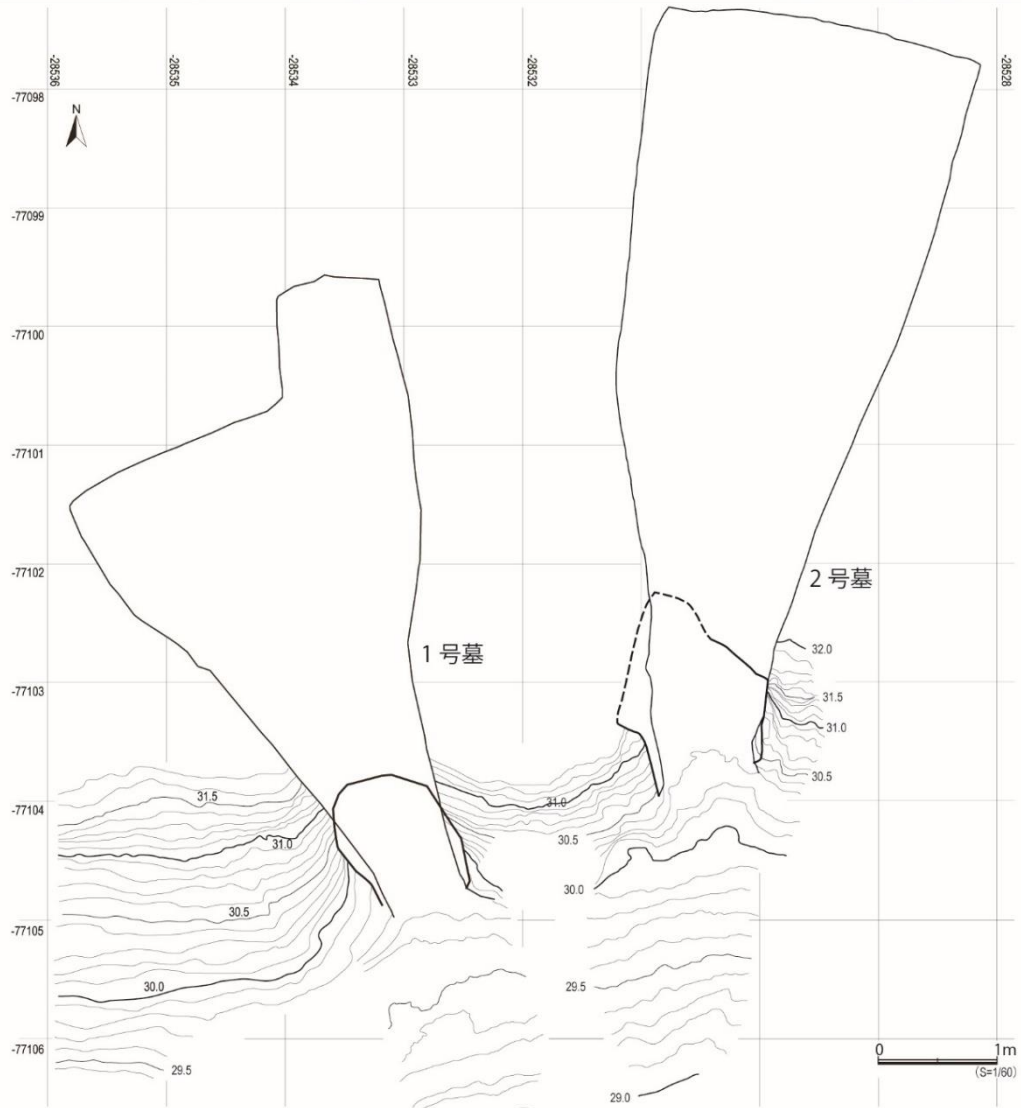
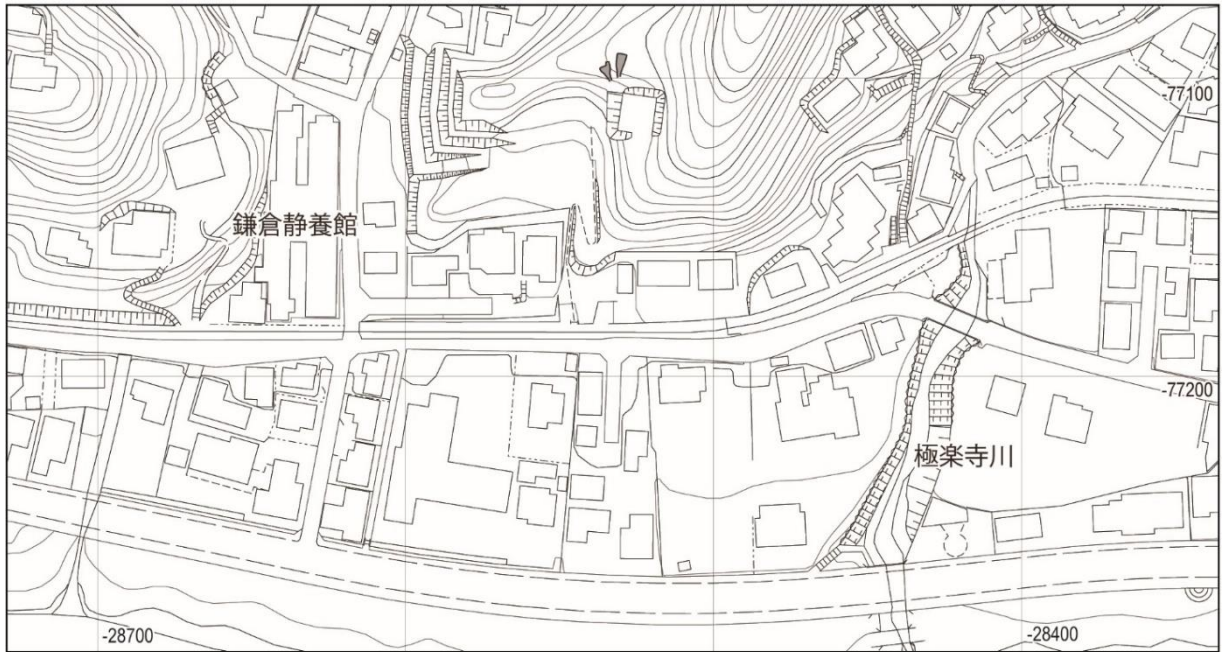
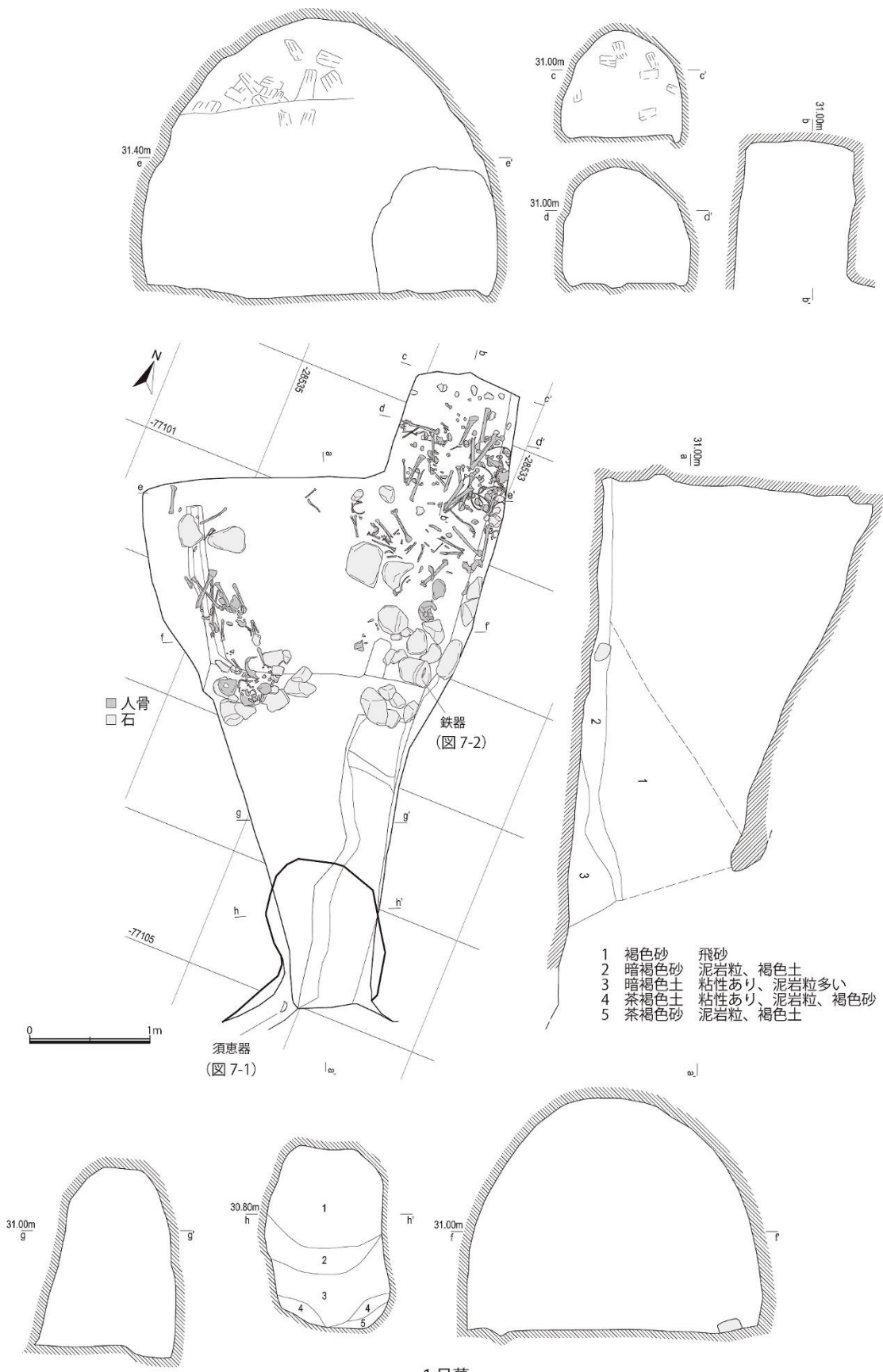


図3 発見された横穴墓の位置(上図)

図4 1号・2号墓配置図(下図)



1号墓
 図5 1号横穴墓 遺構詳細図

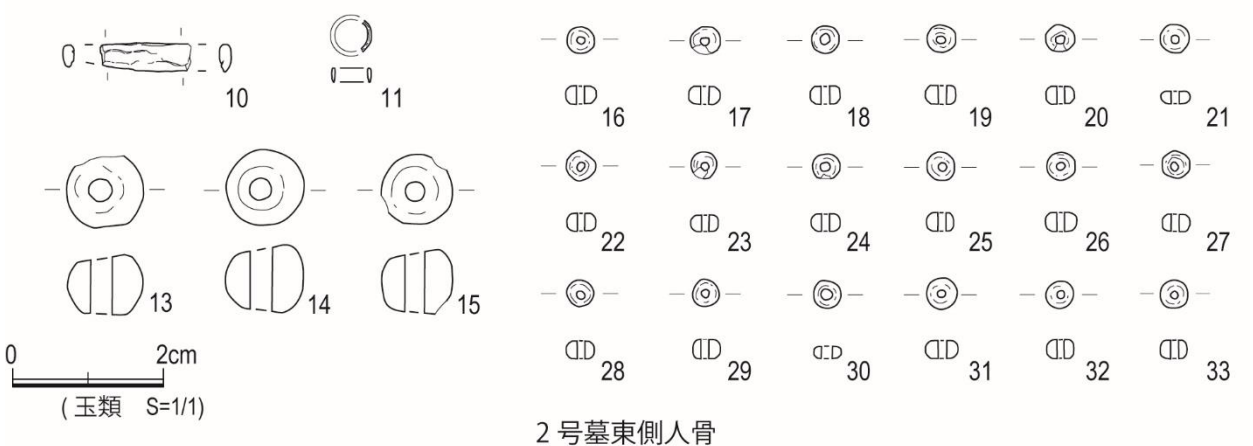
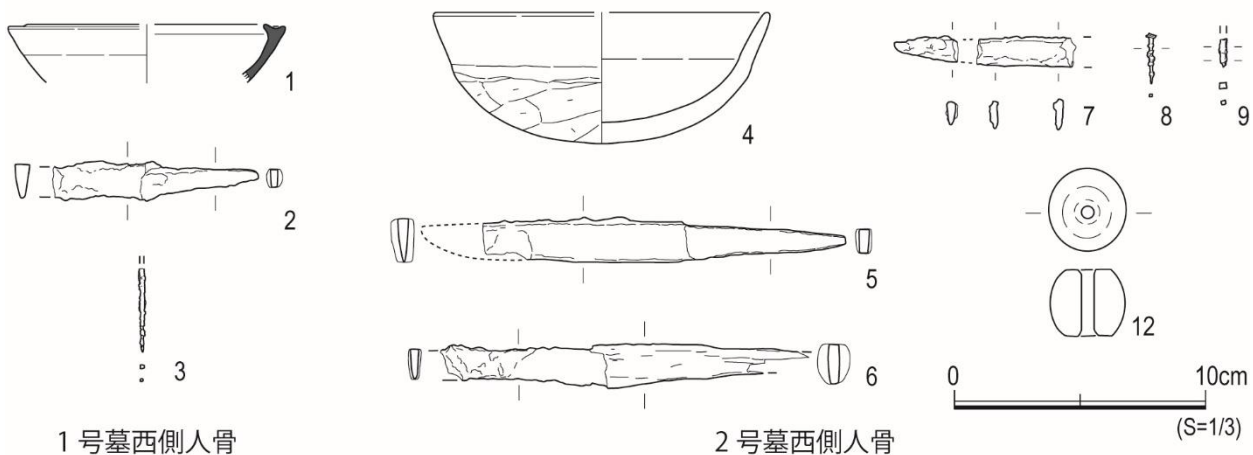
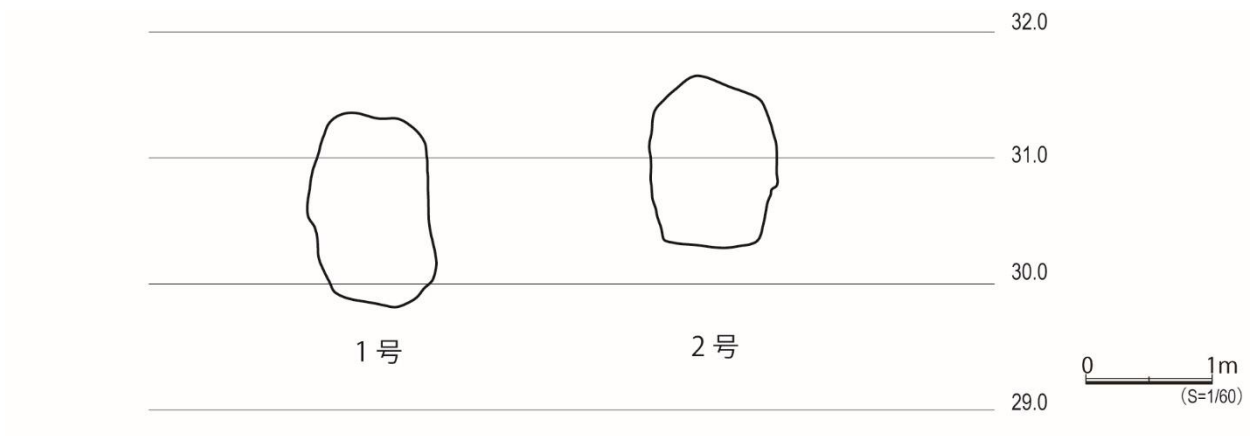


図7 横穴墓入口の正面図(上段) 第8図 出土遺物実測図(下段)

写真 1 遺跡遠景・1号横穴墓 調査前



遺跡遠景(右手山上の白い家の裏)



遺跡遠景(右手の白い家の裏)



遺跡の堆積状況



発見直後の入口確認状況



発見当時の玄室内状況



入口堆積状況



副室付近の人骨出土状況



副室付近の人骨・石の出土状況



玄室内人骨・石の出土状況



玄室内東側人骨出土状況



副室内人骨出土状況



玄室内西側の人骨出土状況



玄室内西側の人骨出土状況

写真3 1号横穴墓 完掘状況・遺物出土状況



入口部分完掘状況



入口部分天井



奥壁



玄室奥部分・副室完掘状況



羨道部分完掘状況(奥から)



羨道・玄室・副室完掘状況



刀子出土状況 (東側人骨入口部分)



須恵器出土状況 (入口部分)

写真 4 2号横穴墓 検出状況・入口堆積土の状況



2号横穴墓検出状況（左は1号横穴墓）



2号横穴墓入口部埋没状況



入口部堆積土下部の土の高まり



入口部堆積土断面



入口部堆積土下部の土の高まり(正面から)



入口部堆積土断面



入口部分版築完掘状況



入口部分完掘状況



玄室内人骨出土状況



東側人骨



東側人骨



西側人骨



西側人骨

写真 6 2号横穴墓 人骨・遺物出土状況、完掘状況



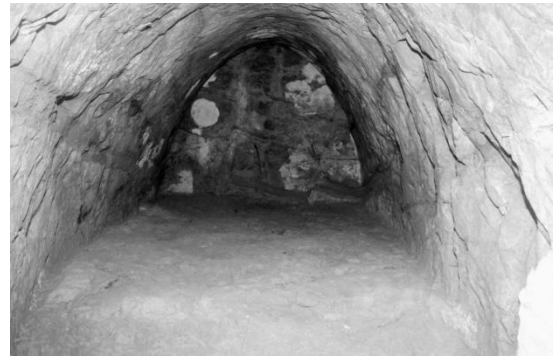
西側人骨



西側人骨(玉の出土状態)



西側人骨土師器坏出土状況



玄室完掘状況



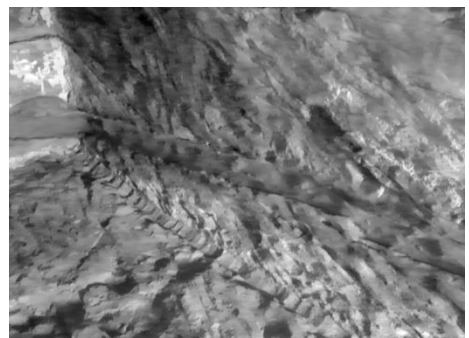
玄室・羨道部分完掘状況



入口完掘状況



天井の肋骨状成形痕



東側側壁下の小溝成形痕

写真7 出土遺物

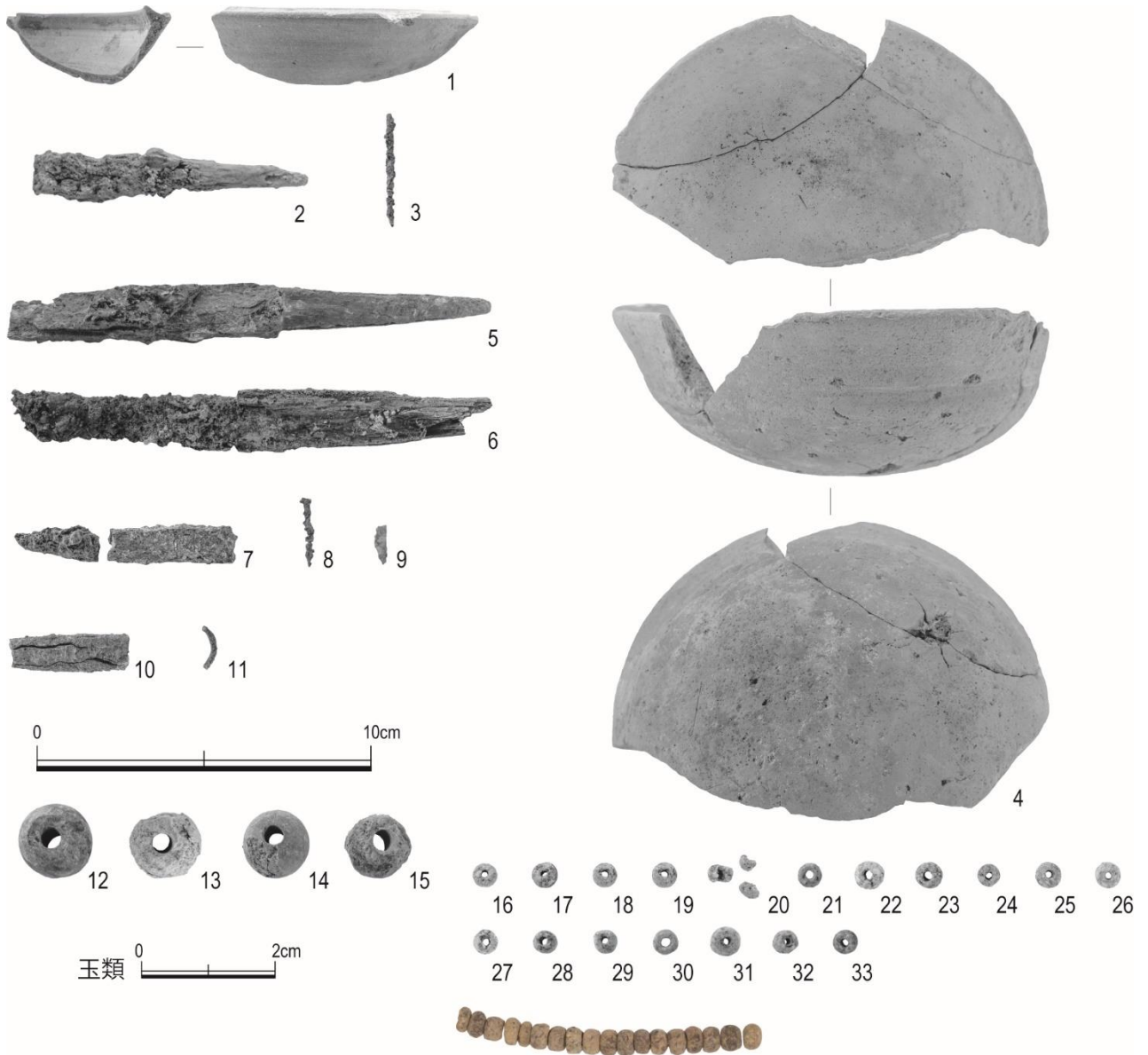


表 1 出土遺物観察表

図版 番号	枝番	遺構	出土場所	出土位置	種別	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ	a:成形 b:胎土・素地 c:色調
						()=復元値 []=残存値			d:釉薬 e:焼成 f:遺存値 g:備考
1		1号横穴墓	入口	岩盤上	須恵器蓋坏	(11.0)		0.3	a:ロクロ成形 b:密・微砂質 c:灰色 e:良好 f:1/10 g:湖西産か
2		1号横穴墓	西側人骨	集石 入口側	刀子	[8.2]	1.5	0.6	a:先端欠失 b:中茎部分に木質残存 c:褐色 f:1/2 g:中茎長4.5cm
3		1号横穴墓			鉄釘	[3.3]		0.15	a:鍛造 b:密 c:褐色 f:9/10 g:良質。頭のみ欠失か。
4		2号横穴墓	西側人骨	西側人骨 頭部左上	土師器 (坏)	(13.1)		5.2	a:外面下部ミガキ調のヘラ削り、口縁部から内部ナデ。滑らか b:密・やや良土 c:淡褐色 e:良好 f:1/2 g:相模型坏に近い
5		2号横穴墓	西側人骨	西側人骨 頭骨上	鉄製品 (刀子)	[14.4]	1.8	0.4	a:先端欠失 b:刀身部分に木質残存。厚さ0.9cm c:褐色 f:2/3 g:中茎長6.5cm
6		2号横穴墓	西側人骨	西側人骨 左手付近	鉄製品 (刀子)	[14.6]	1.8	0.5	a:先端欠失 b:中茎部分に木質残存 c:褐色 f:2/3 :中茎長[8.5cm]
7	1	2号横穴墓	西側人骨	上半身	鉄製品 (刀子)	[2.6]	0.9	0.35	a:刀身・中茎欠失 c:褐色
7	2	2号横穴墓	西側人骨	上半身	鉄製品 (刀子)	[4.0]	1.2	0.4	a:先端・中茎欠失 c:褐色
8		2号横穴墓	西側人骨		鉄製品 (釘)	2.0	0.55	0.15	a:不明 b:密 c:褐色灰白色の錆有り f:2/5 g:良質。頭部幅0.4cm。
9		2号横穴墓	西側人骨		鉄製品 (釘)	[1.2]	0.25	0.25	a:ロクロ・外底回転糸切・板状庄痕・内底回転ナデ b:微砂・雲母・海綿骨針・赤色粒・泥岩粒 やや粗土 c:黄褐色 e:良好 f:1/3
10		2号横穴墓	東側人骨		鉄製品 (工具?)	[3.6]	1.2	0.5	a:刀身部(?) c:褐色 g:厚手の蛤刃。漁労具(?)
11		2号横穴墓	東側人骨		銅製品 (環)	[1.6]	1.2	0.5	a:刀身部(?) c:褐色 g:厚手の蛤刃。漁労具(?)
12		2号横穴墓	西側人骨		骨製品 (玉)	1.1	0.6	0.9	a:ロクロ b:骨 c:淡黄灰色 f:1/1 g:中央孔直径0.2cm。重量1.2g
13		2号横穴墓	東側人骨		骨製品 (玉)	1.0	0.6	0.8	a:ロクロ b:骨 c:淡黄灰色 f:外面若干剥落 g:中央孔直径0.3cm。重量0.9g
14		2号横穴墓	東側人骨		骨製品 (玉)	1.0	0.45	0.9	a:ロクロ b:骨 c:淡黄灰色 f:1/1 g:中央孔直径0.3cm。重量1.1g
15		2号横穴墓	東側人骨		骨製品 (玉)	0.95	0.6	0.85	a:ロクロ b:骨 c:淡黄灰色 f:外面若干剥落 g:中央孔直径0.25cm。重量0.8g
16		2号横穴墓	東側人骨		骨製小玉	0.35		0.25	a:ロクロ b:骨 c:淡黄灰色・一部灰緑色 f:1/1 g:中央孔直径0.1cm
17		2号横穴墓	東側人骨		骨製小玉	0.35		0.28	a:ロクロ b:骨 c:淡黄灰色～灰色 f:1/1 g:中央孔直径0.1cm
18		2号横穴墓	東側人骨		骨製小玉	0.35		0.25	a:ロクロ b:骨 c:淡褐色 f:1/1 g:中央孔直径0.1cm
19		2号横穴墓	東側人骨		骨製小玉	0.38		0.25	a:ロクロ b:骨 c:淡褐色～灰色 f:1/1 g:中央孔直径0.1cm
20		2号横穴墓	東側人骨		骨製小玉	0.35		0.25	a:ロクロ b:骨 c:明灰褐色 f:1/13ヶに分断 g:中央孔直径0.1cm
21		2号横穴墓	東側人骨		骨製小玉	0.35		0.17	a:ロクロ b:骨 c:明灰褐色 f:1/1 g:中央孔直径0.1cm
22		2号横穴墓	東側人骨		骨製小玉	0.35		0.22	a:ロクロ b:骨 c:淡褐色一部明青緑色 f:1/1 g:中央孔直径0.1cm
23		2号横穴墓	東側人骨		骨製小玉	0.35		0.21	a:ロクロ b:骨 c:灰褐色 f:1/1 g:中央孔直径0.1cm
24		2号横穴墓	東側人骨		骨製小玉	0.35		0.23	a:ロクロ b:骨 c:明灰褐色 f:1/1 g:中央孔直径0.1cm
25		2号横穴墓	東側人骨		骨製小玉	0.35		0.24	a:ロクロ b:骨 c:明褐色～灰色 f:1/1 g:中央孔直径0.1cm
26		2号横穴墓	東側人骨		骨製小玉	0.35		0.25	a:ロクロ b:骨 c:淡黄灰色一部灰緑色 f:1/1 g:中央孔直径0.1cm
27		2号横穴墓	東側人骨		骨製小玉	0.35		0.23	a:ロクロ b:骨 c:明灰褐色一部灰色 f:1/1 g:中央孔直径0.1cm
28		2号横穴墓	東側人骨		骨製小玉	0.35		0.23	a:ロクロ b:骨 c:淡褐色一部明青灰色 f:1/1 g:中央孔直径0.1cm
29		2号横穴墓	東側人骨		骨製小玉	0.35		0.25	a:ロクロ b:骨 c:明灰褐色 f:1/1 g:中央孔直径0.1cm
30		2号横穴墓	東側人骨		骨製小玉	0.35		0.15	a:ロクロ b:骨 c:淡褐色 f:1/1 g:中央孔直径0.12cm
31		2号横穴墓	東側人骨		骨製小玉	0.40		0.23	a:ロクロ b:骨 c:明灰褐色 f:1/1 g:中央孔直径0.1cm

図版 番号	枝番	遺構	出土場所	出土位置	種別	口径/長さ 底径/幅 器高/厚さ			a:成形 b:胎土・素地 c:色調 d:釉薬 e:焼成 f:遺存値 g:備考		
						()=復元値 []=残存値					
32		2号横穴墓	東側人骨		骨製小玉	0.35		0.25	a:ロクロ b:骨 c:明灰褐色 f:1/1 g:中央孔直径0.1cm		
33		2号横穴墓	東側人骨		骨製小玉	0.35		0.25	a:ロクロ b:骨 c:灰褐色 f:1/1 g:中央孔直径0.1cm		
34		2号横穴墓	東側人骨		骨製小玉	0.36		0.19	a:ロクロ b:骨 c:灰褐色 f:1/13ヶに破断 g:中央孔直径0.11		

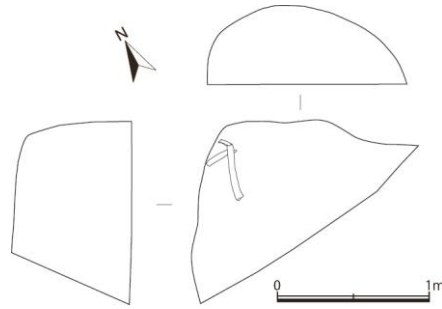


図9 第I期工事で確認された横穴墓残穴

報告書抄録								
ふりがな	かまくらしきょういくいいんかいきょういくぶんかざいぶ ちょうさけんきゅうきょう							
書名	鎌倉市教育委員会教育文化財部 調査研究紀要							
副書名	鎌倉城(No.87)・極楽寺旧境内遺跡(No.291)立会調査報告書							
巻次	第4号							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者	玉林美男							
編集機関	鎌倉市教育委員会							
所在地	〒248-0808 鎌倉市御成町12番18号							
発行年月日	西暦2022年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号				(㎡)	
カマクラ 鎌倉 城 ゴクラクジ キョウダイセキ 極楽寺旧境内遺跡	鎌倉市 稲村ガ崎三丁目 561番275ほか7 筆	14204	87 291	35° 18' 16"	139° 31' 10"	20200413 ~0421 20200507 ~0514	10 15 合計25	宅地造成